自己の生き方を考え，実践していく力をはぐくむための学級活動の指導法に関する研究
― 集団へのかかわり方を自己評価する活動を通して ―

広島市立三篠小学校教諭　　岡　田　由　佳

Ⅰ　研究主題設定の理由

学級活動には，「希望や目標をもって生きる態度の形成」という活動内容があり，生き方にかかわる指導を重視することが求められている。しかし，価値観が多様化する社会において，目指す方向を定めることができず，一瞬の楽しさを求めて刹那主義的に生活する児童の様子が気になるところである。この傾向は，高学年になるにつれて顕著である。

『小学校学習指導要領』の「第４章 特別活動」にも，指導計画の作成に当たって特に配慮する事項として，「学級活動などにおいて，児童が自ら現在及び将来の生き方を考えることができるように工夫すること」と示してある。そこで，これまでに高学年を対象にして身近な大人の生き方に触れる学級活動を行ってきた。その際，児童は，仕事に対して前向きに取り組む大人の姿に共感することができ，将来の夢をおぼろげながらもつこともできた。しかし，児童は，自己の現在と将来を切り離してとらえており，夢はあこがれのままで，自己の生き方を考えるには至らなかった。これは，自己を振り返る活動をしなかったために，自己の現在の姿と活動内容を結び付けて考えることができなかったものととらえる。

このことから，自己の現在の姿を明らかにするために，自己を振り返り，自己評価することを手だてとすることが有効ではないか考えた。そこで，本研究では，自己の生き方を考え，実践していく力をはぐくむために，自己評価する活動を組み込んだ学級活動の有効性を実践授業を通して探ることとした。

Ⅱ　研究の方法

自己の生き方を考え，実践していく力をはぐくむために，自己評価する活動を組み込んだ学級活動の有効性を実践授業を通して探る。

Ⅲ　研究の内容

１　研究主題に関する基礎的研究

(1) 自己の生き方を考え，実践していく力について

児童は，生涯を通して何らかの集団に所属し，その一員として自己は何をどのようにすべきかについて考えながら行動していく。このことは，一人一人の生き方そのものであると考える。このように集団とのかかわりの中で，生涯を通して自己の生き方を考え，実践していく力の基盤をはぐくむことが学級活動の目的の一つである。

本研究では，「自己の生き方を考え，実践していく力」を，「学級集団の一員として，自己は何をどのようにすべきかを考え，行動し，行動した様子を振り返り，さらによりよくする方法を考える力」であるととらえ，表１のように整理した。

表１　自己の生き方を考え，実践していく力

① 何をどのようにするかを考える。（ＰＬＡＮ－計画）
② 考えたことを基に行動する。（ＤＯ－実行）
③ 行動した様子を見つめる。（ＣＨＥＣＫ－確認）
④ よりよくする方法を考える。（ＡＣＴＩＯＮ－改善）

(2) 自己評価する活動の必要性について

学級活動においては，活動はするが，活動した様子を振り返って，どうしてそのように活動したのかという理由を明確にするまでには至っていないのが現状であり，課題となっている。そこで，児童が集

団の一員として，自分は何をどのようにすべきか考えながら行動するとき，どうしてそのように考え行動するのかという理由を明確にもたせることが重要となる。

梶田叡一は，『＜自己＞を育てる』で自己評価を「振り返りの場」とし，「振り返り」とは，「自分自身の活動の跡を見つめ直し，さらには，自分自身の在り方を考え直してみること」と定義している。さらに「こうしたことの累積によってはじめて，自分の判断や言動の内的な拠り所もできていくのである」とも述べている。したがって，どうしてそのように考え行動するのかという理由を明確にもたせるために，自己評価する活動を繰り返すことが必要となる。

(3) 集団へのかかわり方を自己評価する活動について

『小学校学習指導要領』に 特別活動の目標として，「望ましい集団活動を通して，心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに，集団の一員としての自覚を深め，協力してよりよい生活を築こうとする自主的，実践的な態度を育てる」と示してある。「望ましい集団活動」の過程で，自己が「集団の一員としての自覚」を深めることができるのであり，そのことがまた，望ましい集団として高まっていくことにつながる。だからこそ，児童が所属する集団の状況を見つめ，集団とのかかわりの中で，自己の果たすべき役割や責任を感じ取り，何をどのようにするかを考えることができるようにすることが大切である。あわせて，児童が，自己だけでなく，集団が今どのような状況なのか，集団としての課題は何なのか，どのように改善していけばよいのかについても絶えず意識することができるようにすることも重要となる。

そこで本研究では，児童が学級活動を「集団」としての側面と「自己」としての側面の両側面から振り返ることを「集団へのかかわり方を自己評価する」と呼び，それぞれの側面からの振り返りを「集団を評価する」，「自己を評価する」と呼ぶこととする。「集団を評価する」とは，「自己の生き方を考え，実践していく力」（表１）の①～④について，集団としてはどうであるかを考え，またどうしてそのように考えたのか理由を明確にすることであり，「自己を評価する」とは，「自己の生き方を考え，実践していく力」（表１）の①～④について，個人としてはどうであるかを考え，またどうしてそのように考えたのか理由を明確にすることである。

このようにして，集団へのかかわり方を自己評価したことを生かして活動することで，活動が充実し高まっていく。このことを繰り返すことが「自己の生き方を考え，実践していく力」をはぐくむことにつながると考え，その過程を図１に示した。

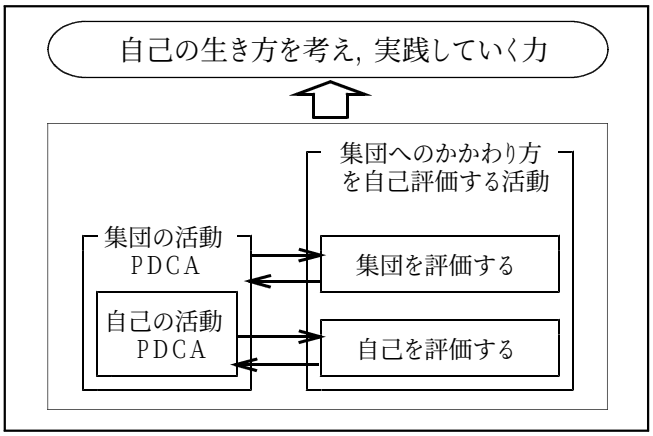


図１　自己の生き方を考え，実践していく力をはぐくむ過程図

２　単元の計画と指導法の工夫

次のように単元の計画を立て，指導法を工夫した。

(1) 対象学年　第６学年３組（３６名）

(2) 単元名　「目指せ！伝説の６年３組」

(3) 単元の構想

本単元は，集団の活動と自己の活動の二つの側面から構成するものとする。

まず，集団の活動として，卒業を意識し始める時期をとらえ，「６年３組の力でよりよい小学校に変えていこう」と呼び掛け，児童の活動意欲を喚起する。話し合いにより活動内容（自分から気持ちのよいあいさつをして，よりよい学校にする）を決定する際，普段の生活の中に価値のあることが多く含まれていることに気付かせるようにする。小さな努力でも集団で積み重ねることで，学校全体を変える大きな力になることを実感させたい。

個人の活動として，集団へのかかわり方を自己評価するために,自己と向き合う時間を毎時間確保し，集団における自己を客観的に見つめるようにする。

(4) 単元計画　７時間＋合計８日間の活動（表２及び表３）

単元の観点別評価規準（表２）は，集団と自己を評価することができるように，集団に関する項目と自己に関する項目を設定する。まず，「関心・意欲・態度」,「思考・判断」,「表現・技能」,「知識・理解」という四つの評価の観点に分ける。さらにそれぞれを「ＰＬＡＮ－計画」(【P】),「ＤＯ－実行」(【D】),「ＣＨＥＣＫ－確認」(【C】),「ＡＣＴＩＯＮ－改善」（【A】）の各過程に分ける。指導内容を重点化するために，評価する項目を精選する。表の中に空欄があるのはこのためである。この観点別評価規準は，教師が児童の活動を評価する際に用いる。同時にワークシートや振り返りカードを作成する際にも用いる。つまり，児童は，この観点別評価規準に基づいて，集団へのかかわり方を自己評価するのである。

指導と評価の計画（表３）は，観点別評価規準と同様に,「ＰＬＡＮ－計画」,「ＤＯ－実行」,「ＣＨＥＣＫ－確認」,「ＡＣＴＩＯＮ－改善」のように計画する。自己評価は，各過程で段階的に行う。この過程を一次と二次で二回繰り返すことにより，自己評価を深めることができると考える。「ＤＯ－実行」の段階は，一次と二次で合計８日間の活動を計画している。この段階では，次に活動するときにはどのようにするかという改善点を明らかにすることを積み重ねていく。

表２　単元の観点別評価規準

		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
集団に関して	【P】	クラスで取り組む活動の内容や計画，めあてなどを進んで考えようとする。	どのように活動すれば「伝説の６年３組」と呼ばれるようになるのかを考えることができる。	クラスで取り組む活動の内容や計画，めあてなどについて話し合うことができる。	クラスで取り組む活動の意義やねらいを理解することができる。
	【D】	クラスの一員としての自覚をもち，進んで活動しようとする。			
	【C】	クラスの活動の様子を進んで振り返ろうとする。	クラスの活動を通してクラスが目指す方向に向かっているかどうかを考えることができる。	友達の活動の様子を評価してワークシートに表現することができる。	
	【A】	さらに「伝説の６年３組」に近付くために今までの活動をどのように改善したらよいかを進んで考えようとする。	さらに「伝説の６年３組」に近付くために今までの活動をどのように改善したらよいかを考えることができる。		
自己に関して	【P】	自分の計画やめあてを進んで考えようとする。	よりよい小学校にするために自分にできることは何かを考える。	自分の計画やめあてを交流することができる。	
	【D】		その日の活動を基にして次の日はどのように活動したらよいかを考えることができる。	自分の計画やめあてを基にして，どのようにしたらよいかを自分で判断しながら活動することができる。	
	【C】	自分の活動の様子を進んで振り返ろうとする。	クラスの活動にどのようにかかわってきたかについて，自分で確認や反省をすることができる。		クラスの活動にどのようにかかわってきたかについて，自己評価と他者評価を通して自己理解を深めることができる。
	【A】	今後自分はどのようにクラスの活動にかかわっていくかについて進んで考えようとする。	今後自分はどのようにクラスの活動にかかわっていくかについて自分で考えることができる。		

表３　指導と評価の計画

次	学　習　活　動	時	学　習　内　容	評　価 集団に関して	評　価 自己に関して
一	PLAN	1	小学校の今の様子を明らかにし，６年３組の力で，さらによりよい学校にするためにできることはないかを考え，活動内容を検討する。	【P】－（関） 【P】－（技）	
		2	「伝説」を満たす要件をとらえ，活動内容や計画，めあてを決定する。	【P】－（関） 【P】－（思） 【P】－（知）	
		3	自分の力をクラスの活動のために生かすことを意識して，自分が取り組むことの計画やめあてを自分で考える。		【P】－（関） 【P】－（思） 【P】－（技）
	D　O	4日間	決めたことを実行し，一日ごとに活動の様子を反省して振り返りカードに記入していく。	【D】－（関）	【D】－（思） 【D】－（技）
	CHECK	4	(1)　集団としての４日間の活動を振り返り，成果と課題を明らかにする。	【C】－（関） 【C】－（思）	
			(2)　個人としての４日間の活動を振り返り，成果と課題を明らかにする。		【C】－（関） 【C】－（思）
	ACTION PLAN	5	(1)　友達からの自分の活動への評価を聞き，自分の評価と比べる。	【C】－（技）	【C】－（知）
			(2)　さらに「伝説の６年３組」に近付くためにどのようにしたらよいかを考える。	【A】【P】－（関） 【A】【P】－（思）	【A】【P】－（関） 【A】【P】－（思）
二	D　O	4日間	決めたことを実行し，一日ごとに活動の様子を反省して振り返りカードに記入していく。	【D】－（関）	【D】－（思） 【D】－（技）
	CHECK	1	(1)　集団としての４日間の活動を振り返り，成果と課題を明らかにする。	【C】－（関） 【C】－（思）	
			(2)　個人としての４日間の活動を振り返り，成果と課題を明らかにする。		【C】－（関） 【C】－（思）
	ACTION PLAN	2	(1)　友達からの自分の活動への評価を聞き，自分の評価と比べる。	【C】－（技）	【C】－（知）
			(2)　さらに「伝説の６年３組」に近付くためにどのようにしたらよいかを考える。	【A】【P】－（関） 【A】【P】－（思）	【A】【P】－（関） 【A】【P】－（思）

(5) 指導法の工夫

集団の活動と自己の活動を充実させるために，指導法を次のように工夫する。

ア　集団の活動の充実のために

(ｱ) 教職員への協力依頼

児童の活動意欲を高めるために，教職員へ児童の活動に対してプラスの評価をするように協力を依頼する。

(ｲ) 名札（図２）

活動中着用させ，周りから注目を浴びるようにすることで，児童に活動することを自覚させる。

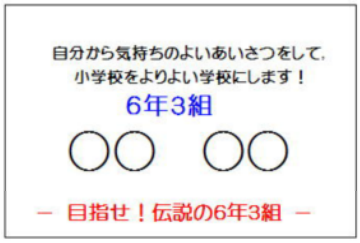


図２　名札

(ｳ) 「お助けカード」（図３）

司会進行の仕方をマニュアル化することでグループでの話し合いを活性化する。

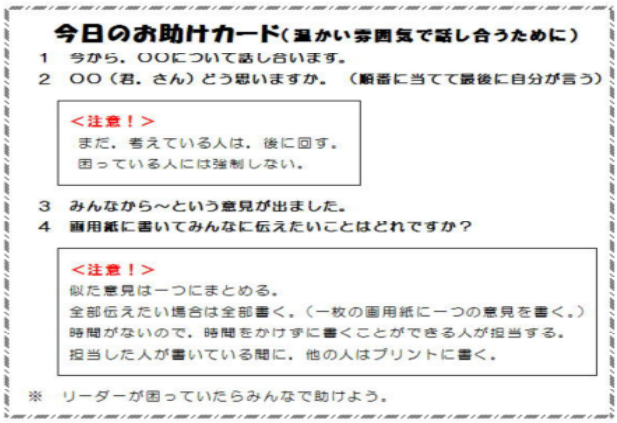


図３　「お助けカード」

(ｴ)「学級活動コーナー」（図４）

活動の流れが一目で分かるような教室掲示をし，活動の足跡を確かめたり，見通しをもったりすることができるようにする。

図４　「学級活動コーナー」

イ　自己の活動の充実のために

(ｱ) 振り返りカード（図５）

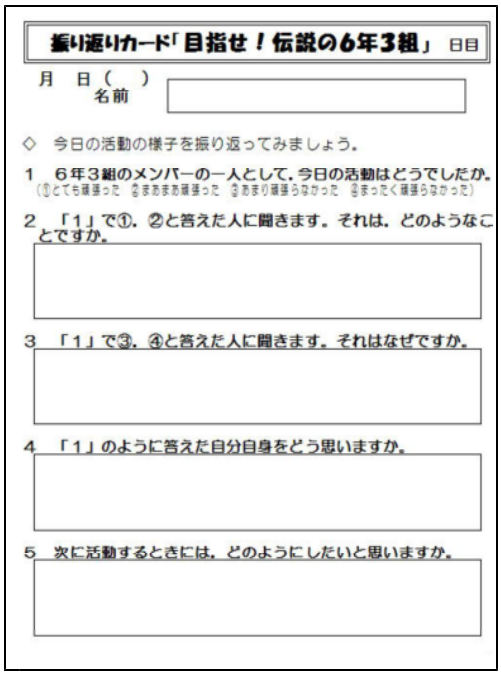
振り返りカードは，日々の学習内容に合わせて項目を設定するが，基本的な内容は，次の通りとする。

ａ　自分はどのように行動したか。

ｂ　そのように行動した理由は何か。

ｃ　「ａ」のように答えた自分自身をどのように思うか。

ｄ　次に活動するときには，どのようにするか。


振り返りカード「目指せ！伝説の6年3組」 日目

月　日（　）
名前

◇　今日の活動の様子を振り返ってみましょう。

1　6年3組のメンバーの一人として，今日の活動はどうでしたか。
（①とても頑張った　②まあまあ頑張った　③あまり頑張らなかった　④まったく頑張らなかった）

2　「1」で①，②と答えた人に聞きます。それは，どのようなことですか。

3　「1」で③，④と答えた人に聞きます。それはなぜですか。

4　「1」のように答えた自分自身をどう思いますか。

5　次に活動するときには，どのようにしたいと思いますか。

図５　振り返りカードの例

自己評価は，この振り返りカードを用いて実践授業や活動終了後に毎日繰り返して行う。振り返りカードの内容の中で特に「ｃ」を重視し，自己から一歩離れて，客観的に自己を見つめる目を育てる。記述する際，掲示物を用意する。（図６）「もう一人の自分になって，自分を見つめよう」と投げ掛け，自己を客観的に見つめることの意味を理解することができるようにする。

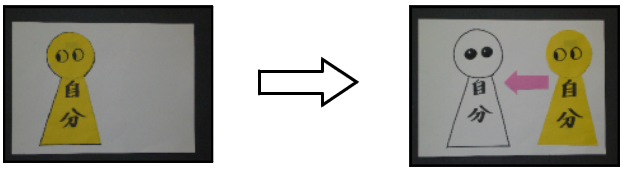
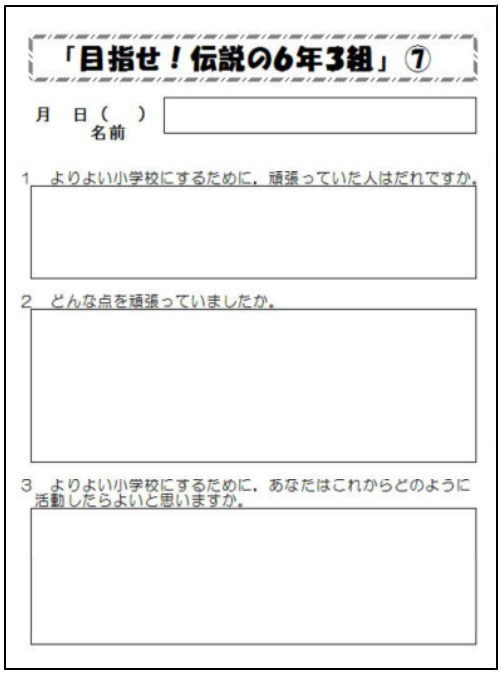


図６　自己を客観的に見つめるための掲示物

(ｲ) ワークシート（図７）

実践授業のねらいに迫ることができるような内容のワークシートを毎時間使用する。振り返りカードとの整合化を図り，実践授業を通して自己に目を向けることができるようにする。


「目指せ！伝説の6年3組」⑦

月　日（　）
名前

1　よりよい小学校にするために，頑張っていた人はだれですか。

2　どんな点を頑張っていましたか。

3　よりよい小学校にするために，あなたはこれからどのように活動したらよいと思いますか。

図７　ワークシートの例

(ｳ) ファイリング

振り返りカードとワークシートをファイリングすることで，自己の意識の変容を理解し，行動の特徴をとらえることができるようにする。

(ｴ) 教師からのコメント

毎日，振り返りカードとワークシートの記述内容をチェックする。一人一人の児童の実態や活動状況

を把握し，前向きに取り組んでいくことができるように励ましのコメントを書き続ける。

(ｵ) 他者からのプラスの評価

実践授業において教師や友達からプラスの評価を受ける場を設定する。

(ｶ) 児童の記述内容の紹介

数名の児童の振り返りカードやワークシートから行動の仕方や自己の見つめ方のよさを紹介する場を設定する。

３　実践授業の分析・考察の方法

分析・考察に当たっては，振り返りカードやワークシートの記述内容を基に次の手順で行った。

(1) 見取り表の作成

観点別評価規準（表２）を基に，振り返りカードやワークシートの記述内容を３段階で評価した見取り表を模造紙に作成した。集団に関する内容と個人に関する内容についてそれぞれ一次と二次に分け，合計４枚の見取り表を作成した。

(2) 記述内容の分類

児童の振り返りカードやワークシートの記述内容を付箋紙に転記し，(1)の見取り表に分類しながら添付した。（図８）

図８　記述内容を分類した見取り表

(3) 一次と二次の記述内容の比較

一次と二次の記述内容を比較し，児童の意識や行動の変容と指導法の工夫との関連性を探った。

(4) 対象児童Ａ児の一次と二次の記述内容の比較

対象児童Ａ児の記述内容に注目し，意識や行動の変容と指導法の工夫との関連性を探った。

４　実践授業の分析・考察

児童の意識や行動の変容を明らかにするために，すべての項目について分析・考察を行った。ここでは，実際に活動した場面である「ＤＯ－実行」に焦点を当て，クラスの全体的な変容をとらえることにする。また，対象児童Ａ児の記述内容を取り上げ，個人の変容をとらえることにする。

(1) クラスの全体的な意識や行動の変容

図９は，「その日の活動を基にして，次の日はどのように活動したらよいかを考える」ことができる（思考・判断）人数の割合を示したものである。

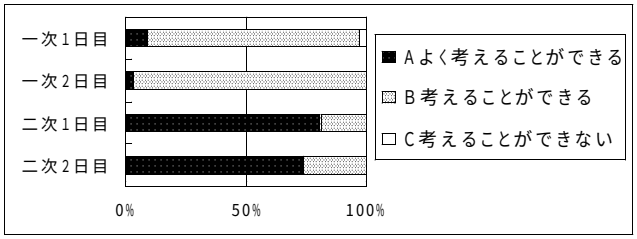


図９　思考・判断の人数の割合（N=36）

「よく考えることができる」と評価できる割合は，一次は平均して６％に対して，二次は平均して 78％と増えていることが分かる。

図 10 は，「前日に考えた自己のめあてや計画を基にして，どのようにしたらよいかを判断しながら活動する」ことができる（技能・表現）人数の割合を示したものである。

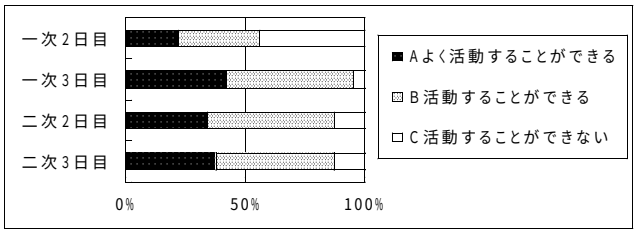


図10　表現・技能の人数の割合（N=36）

「よく活動することができる」と評価できる割合は，一次２日目には 22 ％であったものが，３日目には 42 ％に増えるが，二次の２日目には 34 ％，３日目には 38 ％と減っていることが分かる。これは，児童の活動に対する評価が客観的になってきたものととらえる。このことから，数値的には低下が見られるが, 自己評価する力は伸びていると考えられる。

さらにこの場面の記述内容について詳しく分析し

てみると，一次から二次になるにつれて，大きく変容していることが分かった。また，一次と二次にはそれぞれ特徴があることも分かった。その特徴がよく表れていると思われる児童の記述を取り上げ，表４のようにまとめた。前日に立てためあてに基づいてどのように活動しているかを分析するために，同じ児童の記述を一つの番号として示し，左右に並べた。また，児童の意識や行動の変容が分かるように，一次と二次の記述を上下に並べた。さらに，指導法の工夫についてもまとめた。

表４　「ＤＯ－実行」の主な記述

		前日に立てためあて（思考・判断）		前日に立てためあてを基にした活動（技能・表現）	指導法の工夫
一次	2日目	(1-a) 大きい声でたくさんの人にあいさつをする。	3日目	(1-b) 先生や友達とかに，大きくはっきり言ったと思った。	・振り返りカードによる自己評価の積み重ね
		(2-a) なるべくたくさんの人に大きい声で笑顔であいさつできたらよい。		(2-b) 朝たくさんの人に笑顔であいさつした。	
	3日目	(3-a) あまりあいさつができなかったので，次からちゃんとあいさつしたい。明日は進んでできるとよいと思います。	4日目	(3-b) 先生にあいさつすると笑ってくれました。私も先生も気分がよくなったと思いました。	・記述内容の紹介 ・自己を客観的に見つめるための掲示物 ・振り返りカードによる自己評価の積み重ね
		(4-a) 相手に伝わるようにはっきり言いたいと思います。		(4-b) 先生たちにあいさつをすると，先生は「笑顔でいいねえ。」と言ったからです。昨日の反省を生かして，相手に伝わったと思います。	
二次	2日目	(5-a) 自分のやっていることだけしか目に入らない自分がとても情けなかった。周りのこともきちんと意識して，「私の近くにいる人には必ずあいさつをする」を目標に頑張ります。	3日目	(5-b) 私が今日あいさつをした先生は全員私のあいさつに応えてくれました。前は気付いてくれなかった先生も気付いてくれてとても嬉しかった。	・友達からのプラスの評価 ・振り返りカードによる自己評価の積み重ね
		(6-a) ただあいさつするだけではなく相手が気持ちよくなるようなあいさつをしたいです。		(6-b) 掃除に行く途中先生が歩いているとき，私が後ろから歩いていて，先生が気付かなかったらいけないので，少し先に歩き，先生の顔を見てあいさつができた。	
	3日目	(7-a) 先生に言うときはピシッとしてはっきり敬語で言って，低学年には親しげな口調で笑顔で元気に言ったらよいと思う。	4日目	(7-b) 今日はあまりできなかったけど相手の気持ちは考えていた。	・振り返りカードによる自己評価の積み重ね
		(8-a) 大きな声であいさつできたことはよいことだけど，自分勝手にあいさつしてもだめだと思いました。相手のことを考えて場の雰囲気に合ったあいさつをしたいと思います。		(8-b) 今日は，いろいろな人にあいさつができました。相手の人も笑顔で返してくれました。	

一次前半は，シンプルな表現が多く，自分がしたことのみを記述している。(1-a)，(2-a)，(2-b)には，「たくさん」という言葉が使われていることから，あいさつの量を意識していることが分かる。この段階において，児童には自己評価の経験が少ないため，活動を具体的に想起して自己評価することができなかったものととらえる。自己を客観的に見つめることも不十分である。一次後半の(3-b)，(4-b)には，相手の反応について記述している。これは，前日に立てためあてである(4-a)を紹介する工夫（指導法の工夫：記述内容の紹介）が有効であったと思われる。このことから，友達の活動のよさを自己の活動に取り込んでいこうとした児童の姿をとらえることができる。また，(3-b)，(4-b)には，活動の効果について記述している。これは，自己を客観的に見つめることを意識付ける工夫（指導法の工夫：自己を客観的に見つめるための掲示物）が有効であったと思われる。このことから，自己から一歩離れて，自己の活動を振り返ろうとした児童の姿をとらえることができる。

二次での記述内容の変容には，一次の「ＤＯ－実行」の後の「ＣＨＥＣＫ－確認」や「ＡＣＴＩＯＮ－改善」での自己評価が影響していると思われる。一次の「ＣＨＥＣＫ－確認」の段階では，「実行→復習（振り返り）の周期ができている。復習（振り返り）を毎日欠かさずやっていることはすごいと思

う。」という記述があった。自己評価の意義に気付いた児童の姿をとらえることができる。その後の「ＡＣＴＩＯＮ－改善」の段階では，「人に会ったらすぐ元気よくあいさつをする。そしたら相手も気持ちよいと気付いて，よい効果が出ると思う。」という記述があった。このことから，「学校全体によりよい効果が出るような活動」という本来のねらいに絡めて，「今後自分はクラスの活動にどのようにかかわっていくか。」を考えることができた児童の姿をとらえることができる。

この一次の「ＣＨＥＣＫ－確認」や「ＡＣＴＩＯＮ－改善」での自己評価を経て，二次の「ＤＯ－実行」の段階に入った。二次前半の(5-a)は，「自分がとても情けなかった。」と自分を厳しく見つめ，活動した結果，(5-b)のように「とても嬉しかった。」と記述している。(6-a)の「相手が気持ちよくなるようなあいさつ」というめあてに対して，(6-b)は，「少し先に歩き,先生の顔を見てあいさつができた。」と記述している。これらのことから，振り返りカードによる自己評価の工夫（指導法の工夫：振り返りカードの工夫）が有効であったと思われる。特に，「そのような自分自身をどう思うか。」と振り返りカードを用いて自己に問い続けたことで，自己を客観的に見つめ，自己をコントロールして行動しようとした児童の姿をとらえることができる。

二次後半の(7-a)，(8-a)には，人や場に合わせてどのようにあいさつをしたらよいか考えたことを記述している。これらのことから改善点を明らかにする自己評価の工夫（指導法の工夫：振り返りカードの工夫）が有効であったと思われる。「次に活動するときには，どのようにするか。」と考え続けたことで，意識する対象を「自分」から「相手」や「場」へ広げ，活動する内容を「たくさん」から「どのように」のように「量」から「質」へと深めた児童の姿をとらえることができる。

児童の意識や行動の変容がさらに発展し，二次の「ＣＨＥＣＫ－確認」や「ＡＣＴＩＯＮ－改善」での自己評価につながった。二次の「ＣＨＥＣＫ－確認」の段階では，「この学校のいろいろな先生が６年３組のことをほめてくれるし，みんなもやる気満々なので，私は『伝説の６年３組』に近付いていっているんだなあと思いました。」という記述があった。活動の成果を確認し充実感をもった児童の姿をとらえることができる。このことから，集団の活動の充実のための工夫が有効であったと思われる。「ＡＣＴＩＯＮ－改善」の段階では，「あいさつもこれからずっと続けていくけど，他の目標のときも計画－実行－振り返り－改善を繰り返していきたいと思います。」という記述があった。自己評価の意義を再確認し，他の場面にも応用しようという意欲をもつことができた児童の姿をとらえることができる。

(2) 記述内容に見る対象児童Ａ児の変容

対象児童Ａ児のワークシートや振り返りカードには，表５のような記述内容が見られた。

表５　対象児童Ａ児の記述

設　問	記　述　内　容
なぜよりよい小学校にしたいですか。	①　よく分からない。（一次１時）
６年３組のメンバーの一人として，今日の活動はどうでしたか。	②　まあまあ頑張った。（一次１日目の活動） ③　あまり頑張らなかった。（二次２日目の活動）
とても頑張ったのはどのようなことですか。	④　教頭先生が「６年生は変わったなあ。」と言ってくれました。（二次３日目の活動）
６年３組のメンバーの一人として，今日の活動はどうでしたか。	⑤　先生に会ったら止まってお辞儀をしてあいさつをした。授業が始まるときに，大きな声で「お願いします。」と言った。（二次３日目の活動）
４日間の活動を評価してみましょう。「伝説の６年３組」に近付いてきていると思うのはなぜですか。	⑥　前（今まで）の６年３組は，あいさつもろくにしないちょっと気分の悪い組（クラス）でした。しかし，先生が「目指せ！伝説の６年３組」という目標をつくって，みんながとても明るくなったし，とてもあいさつをするようになりました。５年のときはだめな５年でしたが，６年になって先生たちに感心されることができたと思いました。そして先生がつくった名札で２組の人もその名札をほしいと言って，あいさつ運動が広まってとてもよい組（クラス）になったと思います。（二次１時）
よりよい小学校にするためにあなたはこれからどのように活動したらよいと思いますか。	⑦　次はあいさつも続けていって，規則を守るように注意して活動したらよいと思います。そして，自分たちもちゃんと規則を守っていってあいさつみたいに広めるようにしたいです。（二次２時）

A児は，スタートの時点で，①の「よく分からない。」や②の「まあまあ頑張った。」のようなあいまいな評価を繰り返していた。実際にこの頃のA児の活動の様子を観察した内容を想起してみても，集団に流され，活動に対して受け身がちであるという状態であった。活動の意義や必要性を感じ取ることができず，意欲をもつことができなかったためであろう。自己を客観的に見つめることも不十分であった。このようなA児に，教師は赤ペンで「自分自身を見つめることは，難しいことでもあり，時間が掛かることでもあるね。」や「A児は今日しっかりと意見を出していました。進んで考えようとしていたと思うよ。このような自分を見つめるといいよ。」のように共感や励ましのコメントを書き続けた。

③では，「あまり頑張らなかった。」と初めて厳しい評価をしている。③を記述する前の一次５時で，「誰がどのようなことを頑張っていたか。」を発表し合う活動を行った。このとき，A児は，友達からの評価を受けることはなかった。この日の振り返りカードに，「みんなすごく頑張っているんだと思って，ぼくも見習いたいと思いました。」と記述していた。このことから，A児は，友達の活動の様子を知り，刺激を受け，自分も意欲的に取り組もうと判断したものととらえる。自己も評価されたいという願いは，自己評価を厳しくさせた。これは，自己評価を繰り返したことで，他者から評価されるために，自己はどのように行動しなければならないか考えることができたためであるととらえる。自己評価と他者からのプラスの評価の設定が効果的に作用し合ったものと考える。このA児に対して教師は赤ペンで「それが学級活動のよいところですね。人が頑張っているのを見て自分も頑張る，さらにそれを見て，他の人も頑張る・・・こうやってお互いに高まっていくのです。」というコメントを書いた。

④では，「教頭先生が『６年生は変わったなあ。』と言ってくれました。」と記述し，その日の活動の自己評価は，「とても頑張った。」としている。前日の自己評価は③の「あまり頑張らなかった。」であるのに対し，２段階も評価が上昇している。この日のA児の活動の様子を想起してみると活動自体は，前日と変わらない。違いがあるのは，ほめられたことである。このことから，意欲的に活動した様子を教師から認められ，自信を付けたものととらえる。その日の振り返りカードの他の設問に対して，「ちょっとは変われたんだと思いました。もっと変わったなあと思われるようになりたいです。」と記述していた。

⑤を記述する頃から，A児の記述は具体的になり始めた。何をどのようにするのか判断しながら活動することができるようになったものととらえる。

⑥の記述から，A児は，教師からほめられたことに喜びを感じるとともに，ほめられた自己やクラスを客観的に見つめることができていることが分かる。さらに，今までのクラスの様子と比べ，変容してきたことに喜びと自信を感じていることも分かる。これに対して，教師は赤ペンで，「よくクラスのことを見つめていますね。さすがA児。先生はこれを読んで感動しました。是非このことを発表してみんなに伝えてください。」というコメントを書いた。

二次１時においてA児は，教師からのコメント通り，クラス全員の前で⑥の記述を読んだ。さらに教師は，A児の①～⑥の記述内容を板書して，A児の変容を全員に示した。このことは，A児にとっては，自己の変容を意識するだけでなく，自己の記述が取り上げられて授業が展開していったことで，自信をもつことにつながった。また他の児童にとっては，A児の変容を知るだけでなく，自己の変容も意識することにつながった。二次２時で「誰がどのようなことを頑張っていたか。」を発表し合う場面で，多くの児童がA児の変容を挙げていた。一次５時では，誰からも評価されなかったA児であったが，今回は多くの評価を受け，その日の振り返りカードに「自分の名前が出てきてとても嬉しかった。」と記述している。

⑦の記述から，今の活動を続けつつ，他のことにも広げて考えていこうとしていることが分かる。これに対して，教師は赤ペンで，「前（以前）のワークシートと比べても，A児のやる気が出ていることが分かりますね。A児は，この活動を通して随分成

長しました。これからもずっと応援しています。」というコメントで締めくくった。

A児の行動や意識の変容から，A児がどうしてそのように考え行動したのかについて理由を探ってみると次のようなことが分かった。

③では，友達の活動のよさを知ったことで，「ぼくも見習いたい。」と考えたから，自己評価の仕方が変化したのである。④では，教師からプラスの評価を受けたことで，さらにほめられたいと思ったから，「もっと変わったなあと思われるようになりたい。」という記述につながったのである。⑤では，あいさつに対するモラルが基になり，自己の活動の仕方を考え，行動したのである。⑥では，以前の自己と比較することで変容した自己に誇りをもったから，「よい組（クラス）になったと思います。」の記述につながったのである。⑦では，これまでの自己評価を振り返ることで，自己に自信をもつことができたから,「あいさつみたいに広めるようにしたい。」という記述につながったのである。

教師の赤ペンによるコメントは，A児にとって自分の意識や行動の方向付けとなったものととらえる。自分の行動に対して，あるときは，「これでよいのだ。」と確信したり，あるときは，「このようにしてみよう。」という意欲をもつことにつながった。

Ⅳ　成果と課題

１　成果

分析・考察の結果,本実践は自己の生き方を考え,実践していく力をはぐくむうえで次のような成果があったと考える。

○　集団と自己の双方を自己評価することを通して，学級集団を高めることができ，自己の集団へのかかわり方を深く意識させることにつながった。

○　自己評価をする際,「そのように答えた自分自身をどのように思うか。」と自己に問い続けたことで，自己を客観的に見つめる目をはぐくむことができた。そのことが，何をどのようにすべきかを考えて行動することにつながった。

○　自己評価を繰り返すことで，自己が集団の一員として自己は何をどのようにすべきか考えながら行動するとき，どうしてそのように考え行動するのかという理由を明確にすることができた。

○　自己評価する活動を繰り返すことで，変容してきた自己に気付くことができた。そのことが自信となって，他の場面にもこの活動を生かしていこうとするようになった。

２　課題

分析・考察の結果，次のような課題が明確になった。

○　児童の振り返りカードやワークシートの記述に「先生たちが何かを計画するのではなく，自分たちの力で活動を持続させたい。」という活動意欲を表す内容があった。児童のこのような活動意欲を十分に満たすことができるようにするために，指導計画に時間的な幅をもたせておく必要があると考える。

○　観点別評価規準を基に振り返りカードやワークシートの設問を作成した。活動内容と評価内容のずれを調整するために，具体的活動を決定した後でもう一度，観点別評価規準と振り返りカードやワークシートの設問との整合性を図る必要があると考える。

○　この活動を日常生活につなげて，さらに「自己の生き方を考え，実践していく力」を高めるために，日々の「帰りの会」で自己評価する活動を取り入れていくなどの方法が考えられる。

参考文献

①　安彦忠彦『自己評価－「自己教育論」を超えて－』　図書文化　1992

②　梶田叡一『＜自己＞を育てる』　金子書房　1996

③　宮川八岐『21 世紀型特別活動の実践構想』　明治図書　2001

④　文部省『小学校学習指導要領』　大蔵省印刷局　1998